

ブドウ

勝沼や 馬子もぶどうを 食いながら 芭蕉

さすが葡萄の名産地勝沼である。馬子まで葡萄を食べながら仕事をしていると芭蕉は描いて見せた。荻生徂徠も『峡中紀行』（1706年）で「甲州のぶどう天下に冠たり。涼州のぶどう見るに堪えず」と称賛している。果たして徂徠は涼州の葡萄を看たのであろうか？涼州とは、現在の中国の甘肅省武威県周辺の古名である。西方の遊牧民と接する東西交易の盛んな所であった。唐の詩人・王翰の七言絶句「涼州詞」に葡萄酒が出てくる。すなわち「葡萄の美酒、夜光の杯。飲まんと欲すれば、琵琶馬上に催す。酔うて沙場に臥す、君笑うこと莫かれ。古来征戦、幾人か回る」とある。漢文に精通していた徂徠はすでに唐の時代、涼州に葡萄の美酒があることを知っていたのである。きっと「中国の葡萄と言っても、甲州の葡萄には敵うまい」と大見得を切ったのであろう。徂徠はそれまでの朱子学を批判し、古文辞学を打ち立てたが、その学風はやがて本居宣長らの国学の形成に影響を与えている。ちなみに天照大神男神説を近世になって唱えたのも徂徠であった。

ところで葡萄から葡萄酒ができることは既に『神農本草経』に掲載されている。すなわち「葡萄、味甘平、筋骨湿痺を主り、気を益し、力を倍し、志を強くし、人をして肥健ならしめ、饑に耐え、風寒を忍ばしめる。久しく食すれば身を軽くし、老いず、年を延ぶ。酒に作れる」とあり、唯一酒ができる本草として葡萄を挙げている。

日本における葡萄の歴史も古い。弥生時代の遺跡からも野生種の葡萄が確認されている。また縄文中期には酒造具であろう有孔罎付土器が存在しており、葡萄を発酵させた飲料が供された可能性もある。「ブドウ」はペルシャのフェルガーナ語のブーダウが訛ったものと言われているので大和言葉ではない。古代日本では、葡萄は「エビカツラ」（蒲『古事記』）（蒲陶『日本書紀』）、「エビツラ」（依比都良『大同類聚方』）、「オホエビカツラ」（蒲陶『医心方』）、「エビカツラ」（紫葛『倭名類聚鈔』）、「エビ」（『秀真伝』）などと呼ばれていた。「えび色」といえば今でも「葡萄色」と書き、葡萄の実やワインレッドの色を指している。伊勢海老の甲羅の色にも似ている。

養老2年（718年）、行基が甲斐巡錫の折、勝沼の大岩の上で3週間の結跏趺坐をすると、右手に葡萄を持った薬師如来が霊夢となって現れた。そこで薬師如来を木彫りにして勝沼の大善寺に安置すると、葡萄の樹を発見した。これを菓草として育てたのが甲州葡萄の始まりだと伝えられている。薬師如来を本尊とする大善寺は「ぶどう寺」として有名である。その後文治2年（1186年）、雨宮勘解由という人が勝沼の上岩崎で山葡萄の変性種を見つけ、彼の子孫が改良を重ねて現在の甲州葡萄に至ったという。その栽培法を助言したり、竹棚作りを発明（1615年）した人こそ、甲斐の長田徳本である。徳本は諏訪にいたときも、花梨栽培の改良法を伝授したという。勝沼の「ぶどうの国文化館」には、徳本の蠟人形と、葡萄棚架作りを指導している彼のガラスエッチングが展示されている。彼は古医学の租であるとともに、民生にも寄与した経世家でもあった。

長田徳本は今年生誕500年を迎えた。それを祝って今回、徳本に因んだ葡萄の歴史を振り返って見た次第である。ワインで乾杯。
(山人)

